

平成30年 6月 26日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780227

氏 名 佐々木 智也

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 プリンストン (国名 アメリカ合衆国)
2. 研究課題名 (和文) : 国際政治における外交交渉の役割の再検討
3. 派遣期間: 平成 30年 2月 1日 ~ 平成 30年 5月 31日 (120日間)
4. 受入機関名・部局名: プリンストン大学政治学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先のプリンストン大学では、主に、出張者自身の研究プロジェクト及び受入研究者であった Kosuke Imai 教授との共同研究プロジェクトに従事した。第一に出張者自身のプロジェクトは、国際危機に至る前に観察される外交交渉の役割及び影響を分析するものである。出張者は分析に用いるために、文書の内容がどのようにいつ変化したのかを推定する統計モデルを構築した。この統計モデルの基礎的部分は日本滞在中に作り、プリンストン大学では政治学の文書に応用する上で必要な修正を行った。さらに、滞在中の2018年4月にアメリカ中西部政治学会 (Midwest Political Science Association) にて、この統計モデルについての口頭発表を行った。出張者の発表したパネルの討論者が、政治学における計量テキスト分析を専門とする Arthur Spirling 教授と Sarah Bouchat 教授であったことは大変幸運であり、有益なコメントを多数もらうことができた。現在はこの発表の場において得たフィードバックを反映させられるよう原稿を修正している段階である。

第二に、受入研究者である Imai 教授ら (他の共著者は、Shusei Eshima (東京大学) と Will Lowe (プリンストン大学)) との共同研究では計量テキスト分析の一つであるトピックモデル、特に Latent Dirichlet Allocation (LDA) を社会科学に応用するためにはどのような拡張が必要か検討し、LDA を発展させた統計モデルを開発している。本研究では、シミュレーションデータや実データ (アメリカ大統領選挙のスピーチ、日英の政党の選挙公約) を用いた分析で、提案手法の頑健性や既存の方法に対する提案手法の優位性を確認した。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

第一に、出張者自身のプロジェクトについて、統計モデルのさらなる拡張と、開発した統計モデルを用いた実際の外交文書の分析に着手する。まず、統計モデルについては、文書内容の変化の程度や深度を推定できるモデルへと拡張したいと考えている。国家間関係や国家の対外認識は絶えず変化しているが、その変化が一時的なものなのか持続的なものなのか等、文書内容に表れるであろう変化には様々な種類があると考えられる。どの変化がその後の国家の関係性や対外認識を長期的に形作る重要な変化だったのか、変化の程度とその帰結を文書を用いて分析する統計モデルの開発は、国際政治について新たな知見を得る上で有意義なものであると考えている。

さらに、統計モデルを用いた外交文書の内容分析にも着手する。具体的には、アメリカの外交文書を用いて、冷戦中にアメリカがソ連・東ドイツへの認識をどのように変化させたかを分析するところから始める。将来的には、一国の外交文書だけでなく複数国の外交文書のやり取りが外交関係にどのように影響したのかを分析できるよう他国の外交文書データをも収集し、その分析に適した統計モデルを開発したいと考えている。本研究については、2019 年 1 月に京都で開催される予定の Asian Political Methodology Meeting での口頭発表に応募する予定である。

第二に、出張者と受入研究者の Imai 教授らとの研究については、モデルにいくつかの修正を加えた後、論文としてまとめる。拡張に関して、具体的には文書に付随するメタ情報（著者、作成された時期等）を分析に取り込むモデルを構築する予定である。共著者たちとは来年度中に学会発表に応募することを目指している。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

まず何よりも、受入研究者で、計量政治学の分野における世界的権威である Imai 教授の指導を受けることができたのは非常に有意義なことであった。週に一度、対面で指導を受けられるのは当地に滞在していたからであり、出張者の研究遂行能力の向上及び研究そのものの進展に大きく貢献した。さらに、テクニカルな部分に留まらず、新しい研究を生み出すとはどのような営みなのか、政治学に必要な統計的手法とはどのようなものか、といった根源的な問いについて、彼とのミーティングを通じて考え実践するという機会を得ることができた。

研究能力の向上以外にも、プリンストン大学の滞在で得るものは多数あった。第一に、プリンストン大学は国際関係についての研究が非常に盛んで世界的に著名な研究者が多く在籍しており、国際関係を専攻する学生も非常に多い。出張者は国際関係の授業 (Joanne Gowa 教授が担当) に参加し、アメリカにおける最先端の国際政治理論を網羅的に学習する機会を得た。第二に、プリンストン大学は、政治学における計量分析を扱う授業が体系化されていることで有名であり、出張者は 4 レベルある授業のうちの第四レベル (最上級レベル) の授業を受講した (John Londregan 教授が担当)。この授業は、出張者が取り扱うテキストデータの分析手法について集中的に取り上げており、出張者の実証分析の水準を向上させることができた。第三に、プリンストン大学は世界中から研究者が集まっており、研究者のネットワークを構築することができた。特に、国際政治及び統計学についてプリンストン大学はサバティカルの先生やポストドクが多く集まり、彼らと同じ建物で日々過ごしていたため、毎日のように交流する機会に恵まれた。さらに、Imai 教授の指導する学生十数人が集まる研究発表会にも毎週出席し、当地の院生が研究を進める過程を学び、彼らの研究にコメントすることで最先端の研究に触れた。こうした交流の中で、出張者はネットワークを構築するだけでなく、新たな課題を発見し自分の研究関心を広めることもできた。